神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Even Ifに見るEvenの力

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本多, 啓, HONDA, Akira メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2025

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

Even If に見る *Even* の力

本多啓

1. はじめに

この章では、一般に「譲歩」を表すとされる *even if* を取り上げます[1]。*Even if* の特性について、特に *even* に焦点を置いて考えていきます。*Even if* の仕組みについて、暗黙のうちに当たり前と思い込み、いつの間にか私たちを縛っていた考え方を捨てることから始めて、自由に、しかし根本的なところから、一歩一歩たどたどしく議論していきます。

2. *Even If* はどのような場合に使われる表現か: 意外な(?)事実の確認

Even if の例文としては、たとえば次のようなものがあります。

(1) *Even if* she survives, she'll never fully recover.[2]

これを日本語にするとどうなるでしょうか。すぐに想像がつく通り、この場合の *even if* は日本語では次のように「ても」で訳すことができます。

(2) かりに一命を取り留め**ても**、完治することはないでしょう。

これだけ見ると、英語の *even if* は日本語の「ても」に対応するように思われるかもしれません。

しかし(一見)同じように「ても」を使った日本語文でも、*even if* で訳すことができない場合があることが報告されています(藤井(2002))。

(3)

a.ここで待っていてもバスは来ませんよ。あちらでお待ちにならないと。(廃止になったバス停でバスを待っている人などにかける言葉として)

b. #[3] *Even if* you wait here, the bus won't pick you up.

この場合は(4)のようにifを使えば適格になります。

(4) *If* you wait here, the bus won't pick you up. But if you wait at that bus stop over there, it will.

ところが、ダメなはずの(3b)でも、次のようにすれば適格になります。

(5) *If you wait round the back, the bus won't pick you up. Even if* you wait here, the bus won't pick you up. But if you wait at that bus stop over there, it will.
(田中(2005:25))

なぜこのようなことが起こるのでしょうか。
この章の目標は、*even if*がこのような振舞いを示す仕組みを明らかにすることです。
まずは、先に進む前に、後で参照しやすいように、ここでこれまでの事実をまとめておきましょう。

(6) 廃止になったバス停でバスを待っている人などにかける言葉としてのaに対応する英語表現に*even if*を使いたい場合、bの文を単独で使うと不適切になるが、dのようにすると適切になる。
a. ここで待っていてもバスは来ませんよ。あちらでお待ちにならないと。
b. # *Even if* you wait here, the bus won't pick you up. But if you wait at that bus stop over there, it will.
c. *If* you wait here, the bus won't pick you up. But if you wait at that bus stop over there, it will.
d. *If you wait round the back, the bus won't pick you up. Even if* you wait here, the bus won't pick you up. But if you wait at that bus stop over there, it will.

この章の議論の具体的な手順は次のようになります。

(7)
a. *Even if*はどのような表現かについての仮説を作る。
b. その仮説に基づいて(6)が説明できるかどうかを検証する。
c. さらに同じ仮説に基づいて、*even if*の(6)以外の事実を説明できるかどうかを検証する。

3. 仮説の構築に向けて

3.1. 「譲歩とは何か」という問題は考察の出発点としてふさわしいか？

上の手順(7)にしたがって、まずは「*Even if* はどのような表現か」について考えることにしましょう。しかし、「どのような表現か」を考えるとはいっても、具体的に何を考えたらいいのでしょうか。

これに関してまず思い当たるのは、*even if* といわゆる「譲歩」のつながりでしょう。*Even if* は「譲歩」を表すものだとしばしば言われます。そこで、「譲歩とは何か」ということを考えることが「*even if* はどのような表現か」を明らかにするための糸口のように思われるかもしれません。しかし「譲歩」とは何かを考えることは本当に糸口として有効なのでしょうか。このことについて、ここで少しだけ考えてみましょう。

たとえば、*even if* を含む次の(8a)について考えると、これは背後に(8b)の推論を持つかのように思われるかもしれません。

(8)

a. I wouldn't tell you even if I knew.

b. 私が知っていたら話すとあなたは思っているかもしれない。しかし実はそれは正しくない。実際には私は話さない。

少し形式的な書き方をすれば、次のようになります。

(9) *even if P, Q*:

P であれば Q でないと思われるかもしれないが、実際は Q である。

このような考え方は、*even if* を基本的に *but* が表す「逆接」と同じようなものと捉えていることになります。

しかし、このような考え方は英語の母語話者の感覚を適切にとらえているのでしょうか。

ここで、主要な英英辞典で *even if* についての記述を確認してみたいと思います。英英辞典の記述は母語話者の直観を探るための手がかりとして、完璧ではないものの、かなり有効なものです。実際に調べると、(9)とはかなり異なる記述がされていることが分かります。

(10)

a. LDCE[4]

used to emphasize that, although something may happen or may be true, *it will*

not change a situation:

b. MacMillan[5]

used for emphasizing that although something may happen or may be true, *another situation remains the same*

c. Cambridge[6]

used to say that if something is the case or not, *the result is the same*

d. OALD[7]

despite the fact or belief that; *no matter whether*

e. COBUILD[8]

You use **even if** or **even though** to indicate that *a particular fact does not make the rest of your statement untrue*.

（斜体はすべて本多によります。）

ここに引用した範囲では、上の「逆接」に該当するのはOALDの``despite the fact or belief that"だけです。それ以外の記述（斜字体の部分）を大まかにまとめると、「結局変わらない」「結局同じ」となります。これを(9)の形式に合わせて書くと、次のようになります。

（11）*even if P, Q*:

かりにPであろうと（なかろうと）、Qであることに変わりはない。

(9)と(11)ではだいぶ違うものになっています。(9)では「QかQでないか」が問題になっているのに対して、(11)で問題になっているのは「Pかそれ以外か」です。

これはいったいどういうことでしょうか。

(9)と(11)のどちらが本当の「譲歩」なのでしょうか。実は、この問いに答えようとすることは、筆者にはあまり生産的でないように思われます。しかし、*even if*が譲歩を表すという前提のもとに「譲歩とは何か？」を考え、その答えとして逆接のようなものを想定するところから出発するという方針では、この問いから逃れることはできません。

少なくとも、この問いに触れずにこの章の目標を達成することができれば、それはそれで一つの考え方として成り立つはずです。この章ではそちらの可能性を探っていきたいと思います。

3.2. この章の方針

それでは、「*Even if* はどのような表現か」を考察する出発点として、どのような方針で臨むのがいいのでしょうか。

この章は *even if* と「ても」の振舞いの違いを紹介することから始まったのでした。ということは、「英語の *even if* と日本語の「ても」はどう違うか」という問いから出発すればいいのでしょうか。

しかしながら、この章の末尾で述べるように、この問題を出発点として設定することも実は生産的ではありません。

それではどうするのがいいのでしょうか。

この章では、*even if* それ自体を見ることにしましょう。

4. *Even If* はどのような表現か: 仮説の構築

4.1. 基本的な見通し

とは言ったものの、「*Even if* はどのような表現か」についての仮説を作るに当たって「*even if* それ自体を見る」とは、具体的にはいったいどういうことでしょうか。

Even if を見て分かるのは、これが形式上 *even* と *if* からなる複合表現であるということです。これは当たり前と言えば当たり前ですが、このことに正面から向き合うことで一つの見通しが生まれます。それは次のようなものです。

(12) *Even if* の意味は、かなりの程度まで、*even* の意味と *if* の意味の組み合わせとして説明することができる。

つまり *even if* を *even* と *if* に分解して考えようということです。

Even if は学校教育ではひとまとまりの熟語表現として教えられるので、*even* と *if* に分解して意味を分析する可能性についてはあまり意識されていないかもしれません。しかし、当たり前のことに正面から向き合うことで出てきたこの見通しは、真剣な検討に十分値するものです。

ただし、認知言語学的な意味研究の通例として、この章でもゲシュタルト的な意味観を採用しています。それは、次のような考え方です。

(13) 複合表現の意味は、その構成要素の意味をすべて足したものとは異なりうる。

このことはさまざまな事実によって確かめることができますが、それについてはこの章では割愛します。いずれにしてもこの意味観は、*even if* の場合には、

全体としての意味のかなりの部分が *even* の意味と *if* の意味の足し算として捉えられるであろうと予測するものの、100 パーセントその足し算だけで説明できるとは限らない可能性を認める、ということにつながります。(12)に「かなりの程度まで」を入れてあるのはこのためです。

そして(12)を実質化するためには、*even if* をいったん *even* と *if* に分解してそれぞれの意味を考えたのち、両者の意味を合成したものに基づいて *even if* 全体の意味・用法についての仮説を構築する、という段階が必要になります。これが先に述べた(7)のうちの(7a)に当たります。その上で、その仮説を *even if* の実際の意味・用法と照らし合わせて妥当かどうかを検証していくことになります。それが(7b, c)に当たります。

そこでまず考えなければいけないのは、次のことです。

(14)
a. *If* がやっていることは何か。
b. *Even* がやっていることは何か。

4.2. *If* は何をやっているのか: 十分条件と誘導推論

If については、ここではくわしい議論は省略しますが、簡略に次のように考えておきます。

(15)
a. *If* は十分条件を表わす。
b. 人間の推論の特徴として、誘導推論が作用することがある。(必ず作用するというわけではない。)

(15a)を別の言い方で言うと次のようになります。

(16) *If A, (then) B* とは、「A が成り立っているときには必ず B が成り立っている」ということである。

(15b)の「誘導推論」とは、論理的には正しくないけれども、現実には人がしばしば正しいと思い込んでやってしまう推論のことです[9]。これにはいくつか種類がありますが、その一つとして、「A ならば B」から「A でなければ B でない」を推論してしまうということがあります[10]。たとえば(17a)から(17b)を推論してしまうのがこれに当たります。

(17)
a. 体調がよかったら月末の研究会に出席します。
b. 体調がよくなかったら月末の研究会に出席しません。

この推論は現実としては当たることもありますが、論理的には正しい推論ではありません。実際、(17a)を言った人が研究会当日、体調が悪いのをおして無理に研究会に出席することはありえます。その場合であっても、(17a)が偽であったということにはなりません。しかし日常的には人はこのように推論してしまいがちなのです。

同様の例として、次の(18a)を言われた人が(18b)を推論してしまうということもあります。

(18)
a. 宿題やらないとおやつあげないよ！
b. 宿題をやれば必ずおやつをもらえる

論理的には、(18a)は「宿題をやらなかったらどうなるか」について述べているのであって、「宿題をやったらどうなるか」については一切何も述べていません。したがって、宿題をやった時におやつをもらえなかったとしても、少なくとも論理的には、(18a)を言った人はウソなどを言ったことにはなりません。しかし日常的には(18a)を聞いた人は(18b)を推論してしまうので、(18a)を信じて宿題をやったにもかかわらずおやつをもらえないとなると、大変な騒ぎが起こったりするわけです。

以上、(15)に示したものがここで考える *if* の意味構造となります。

4.3. *Even* は何をやっているのか: 基本的な例文に基づく考察

さて、*if* については前節のように仮定したところで、本節では *even* の検討に移ります。

Even if を *even*＋*if* と捉えた重要な先行研究として、少し古い文献になりますが、Fraser (1969, 1971)があります。Fraser は本章と同じように、*even if* を考えるにあたって、まず *even* の働きを明らかにして、そのうえで *even if* を *even* の働きの一つとして考えるアプローチをとっています。ここでは *even* の働きについての Fraser の考え方をたどっていくことにします。

ということで、*even* について、まずは *if* を含まない次の例文から検討しましょう。

(19)
a. Even Max tried on the pants.
b. Max tried on the pants.

Even を含む(19a)の解釈は、含まない(19b)の解釈とどのように異なるでしょうか。Fraser (1971:152)は(19a)の解釈を次のように記述しています。

(20)
a. Max tried on the pants.　(Max はこのズボンを試着した)
b. Other people tried on the pants.　(Max 以外の人はこのズボンを試着した)
c. The speaker would not expect or would not expect the hearer to expect Max to try on the pants.
(Max はこのズボンを試着しないだろうと話し手自身が思うのが自然だし、また聞き手もそう思うだろうと話し手が思うのが自然だ。)

(20)のうち、(20a)は *even* を含まない(19b)と同じです。つまり、*even* がつくことで、それ以外の部分が文の解釈に加わることになります。
(20)全体に若干の補足を加えて日本語でまとめ直すと、次のようになります。

(21) **Even** *Max* tried on the pants.の意味構造
予想の焦点: Max
誰もが納得するであろう前提:
他の人はこのズボンを試着した。
(ありがちな)例外予想:
でも Max は例外ではないか！ Max は試着しなかったのではないか！
例外予想の打消し・例外性の否定:
そんな Max も試着した。Max も例外ではない。

(21)に基づいてこの文の内容を説明的に日本語にすると、次のようになります。

(22)他の人がこのズボンを試着したというのは誰でも納得することだろう(誰もが納得するであろう前提)。だが、「Max は例外なのではないか、Max はこのズボンを試着しなかったのではないか」と思う人がいるかもしれない(例外の予想)。しかし実は、Max も例外ではない。このズボンは Max も試着したのだ(例外性の否定)。

短い日本語文で表すと、これはおおよそ次のようになります。

(23) あの Max だってこのズボンは試着したんだ。

これに基づいて一般化すると、*even* の意味は次のような構造になっていることになります。

(24) *even X* の意味構造

予想の焦点: X

誰もが納得するであろう前提: X 以外については…だ。

(ありがちな)例外予想:でも X は例外。X は…でない。

例外予想の打消し・例外性の否定:

そんな X も…だ。X も例外ではない。

これに基づいて、他の文を解析したらどうなるでしょうか。*Even* を含むいろいろな文にこの意味構造を適用したときに導き出される解釈は、その文の実際の解釈と一致するでしょうか。次の例で考えてみましょう。

(25)

a. Even Max didn't try on the pants.

b. Even Bill is taller than John.

c. Bill is taller than even John.

それぞれ、次のようになります。

(26) **Even** *Max* didn't try on the pants.の意味構造

予想の焦点:　Max

誰もが納得するであろう前提:　他の人はズボンを試着しなかった。

(ありがちな)例外予想:

でも Max は例外ではないか！Max は試着したのではないか！

例外予想の打消し・例外性の否定:

そんな Max も試着しなかった。Max も例外ではない。

(27)

a. 他の人がこのズボンを試着しなかったというのは誰でも納得することだろう(誰もが納得するであろう前提)。だが、「Max は例外なのではないか、Max はこのズボンを試着したのではないか」と思う人がいるかもしれない(例外の予想)。しかし実は、Max も例外ではない。このズボンは Max も試着しなかったのだ(例外性の否定)。

b. あの Max でさえ、このズボンは試着しなかったのだ。

これはこの文の実際の解釈を記述したものとして妥当です。

(28) **Even** *Bill* is taller than John.の意味構造

予想の焦点:　Bill

誰もが納得するであろう前提:　Bill 以外の人は John より背が高い。

(ありがちな)例外予想:

でも Bill は例外ではないか！Bill は John ほど背が高くないのではないか！

例外予想の打消し・例外性の否定:

そんな Bill も John より背が高い。Bill も例外ではない。

(29)

a. Bill 以外の人が John より背が高いというのは誰でも納得することだろう(誰もが納得するであろう前提)。だが、「Bill は例外なのではないか、Bill は John ほど背が高くないのではないか」と思う人もいるかもしれない(例外の予想)。しかし実は、Bill も例外ではない。Bill も、John より背が高いのだ(例外性の否定)。

b. あの Bill だって、John よりは背が高いのだ。

これもこの文の実際の解釈を記述したものとして妥当です。

ちなみにこの場合、おそらく John はとても背が低い人物なのだろうと推測されることになります。

(30) Bill is taller than **even** *John*.の意味構造

予想の焦点: John

誰もが納得するであろう前提: Bill は John 以外の人より背が高い。

(ありがちな)例外予想: でも John は例外ではないか！John ほどは Bill は背が高くないのではないか！

例外予想の打消し・例外性の否定:
そんな John よりも Bill は背が高い。John も例外ではない。

(31)
a. John 以外の人より Bill が背が高いというのは誰でも納得することだろう(誰もが納得するであろう前提)。だが、「John は例外なのではないか、Bill は John ほど背が高くないのではないか」と思う人もいるかもしれない(例外の予想)。しかし実は、John も例外ではない。John よりも、Bill は背が高いのだ(例外性の否定)。
b. あの John よりも、Bill は背が高いのだ。

これもこの文の実際の解釈を記述したものとして妥当です。

ちなみにこの場合は前の例とは逆に、おそらく John はとても背が高い人物なのだろうと推測されるわけです。*Even Bill is taller than John* (25b) と *Bill is taller than even John* (25c) では *even* の位置が違うだけですが、そのわずかな違いによって John が背の低い人か高い人かが反対になってしまうという興味深い現象が起こっているわけです。

以上、(24) に示したものが Fraser (1969,1971) に基づいて考えた *even* の意味構造ということになります。

4. 4. 合成表現としての *Even If*: 基本的な例文による仮説の構築

以上、*if* と *even* についてそれぞれ別個に考えてきました。

(15)
a. *If* は十分条件を表わす。
b. 人間の推論の特徴として、誘導推論が作用することがある。(必ず作用するというわけではない。)

(24) *even X* の意味構造
予想の焦点: X
誰もが納得するであろう前提: X 以外については…だ。
(ありがちな) 例外予想: でも X は例外。X は…でない。
例外予想の打消し・例外性の否定:
そんな X も…だ。X も例外ではない。

ここではこれらに基づいて、合成表現としての *even if* を検討しましょう。
まずは次の基本的な例文で検証しましょう。

(32) Mary will leave even if John stays.

まずは *even* に注目しましょう。(24)に基づいてこの文を解析してみます。
解析にあたって注意しなければならないのは、*even* の焦点を的確に見ぬくことです。*Even if* をひとまとまりと考えるのではなく、あくまでも *even* に注目することが必要となります。何が言いたいかと言うと、焦点を認定するに当たっては、(33a)のように考えるのではなく、(33b)のように考えなければならないということです。

(33)
a. **even if** (John stays)
b. **even** (if John stays)

実際に解析してみると、次のようになります。

(34) Mary will leave **even** *if John stays*.の意味構造
予想の焦点: ジョンが残った場合 (if John stays)
誰もが納得するであろう前提:
ジョンが残った場合以外に関して言えば、メアリーは帰る。
(ありがちな)例外予想:
でもジョンが残った場合は例外。この場合はメアリーは帰らない。
例外予想の打消し・例外性の否定:
ジョンが残った場合も例外ではない。メアリーは帰る。

これはこの文の意味を適切に捉えていると言えるでしょうか。
(34)に基づいてこの文の内容を説明的に日本語にすると、次のようになります。

(35) ジョンが残る以外の場合、メアリーは帰るというのは誰でも納得することだろう(誰もが納得するであろう前提)。だが、「ジョンが残る場合は例外なのではないか、この場合はメアリーは帰らないのではないか」と思う人がいるかもしれない(ありがちな例外予想)。しかし実は、ジョンが残る場合も例外ではない。その場合でも、メアリーは帰るのだ(例外性の否定)。

先に、(10)に示した英英辞典の意味記述は母語話者の直観をある程度反映していると言いました。それでは、これは(10)に示した英英辞典の記述内容を的確に捉えていると言えるでしょうか。

たとえばOALDの``no matter whether"に基づいてこの(32)を解釈すると、次のようになります。

(36)

a. Mary will leave *no matter whether* (cf. even if) John stays.

b. ジョンが残るか残らないかに関わりなく、いずれにしてもメアリーは帰るのだ。

(35)はこれを捉えています。

またLDCEの``... it will not change a situation"、MacMillanの``another situation remains the same"、Cambridgeの``the result is the same"をこの文に当てはめると次のようになります。

(37) ジョンが残った場合も、結局メアリーが帰ることに変わりはないのだ。

(35)はやはりこれも捉えています。

次に、*if*についての(15)を検証しましょう。(15a)に示した「*If*は十分条件を表わす」は、(35)に合致します。この文の場合、ジョンが残ったときにメアリーがどう行動するかと言えば、帰るわけです。したがって、「ジョンが残る」は「メアリーが帰る」に対する十分条件ということになります。つまり(15a)は成り立っているわけです。

一方、(15b)に示した誘導推論に関して言うと、ここでは誘導推論は有効ではありません。ただし(15b)は「誘導推論が作用することがある(必ず作用するというわけではない)」というものなので、そのことは問題にはなりません。

ということで、*even*についての(24)に加えて*if*についての(15)も、この場合に問題なく成り立っていることになります。

(35)を短い日本語文にまとめて表すと、おおよそ次のようになります。

(38) ジョンが残った場合でも、やはりメアリーは帰るだろう。

先に第3.1節で、次の見方は英英辞典の意味記述に表された母語話者の直観に一致していないと述べたのでした。

(9) *even if P, Q*:
　　P であれば Q でないと思われるかもしれないが、実際は Q である。

それではここでの見方をこの形で表すとどうなるでしょうか。
答えは次のようになります。

(39) *even if P, Q*:
　　P でなければ Q であるのは当然正しいとして、P の場合は例外的に Q ではないと思われるだろう。だが実際は P であっても例外ではなく、Q なのである。

実質的に繰り返しになりますが、これは先に次の(11)として示した英英辞典の見方を捉えています。

(11) *even if P, Q*:
　　かりに P であろうと(なかろうと)、Q であることに変わりはない。

5. *Even If* の正体についての仮説(とりあえずのまとめ)

この章では、*even if* について基本的に次の手順で議論していくと述べました。

(7)
a. *Even if* はどのような表現かについての仮説を作る。
b. その仮説に基づいて(6)が説明できるかどうかを検証する。
c. さらに同じ仮説に基づいて、*even if* の(6)以外の事実を説明できるかどうかを検証する。

そして(7a)について、次のようにして仮説を構築してきました。
まず次の(12)に基づいて、*even if* を *even* と *if* に分けて考えるという方針を立てました。

(12) *Even if* の意味は、かなりの程度まで、*even* の意味と *if* の意味の組み合わせとして説明することができる。

そして *if* と *even* の意味構造について、それぞれ次のように仮説を立てました。

(15)

a. *If* は十分条件を表わす。

b. 人間の推論の特徴として、誘導推論が作用することがある。(必ず作用するというわけではない。)

(24) *even X* の意味構造

予想の焦点: X

誰もが納得するであろう前提: X 以外については…だ。

(ありがちな)例外予想: でも X は例外。X は…でない。

例外予想の打消し・例外性の否定:

そんな X も…だ。X も例外ではない。

以上を合わせる形で *even if* の意味構造についての仮説としてまとめると、次のようになります。

(40) *Even if P, Q* の意味構造

予想の焦点:　P の場合 (if P)

誰もが納得するであろう前提:　P の場合以外に関して言えば、Q

(ありがちな)例外予想: でも P の場合は例外。この場合は Q でない

例外予想の打消し・例外性の否定:　P の場合も例外ではない。Q

この仮説は、例文(32)を参照しながら作ったものですから、この例文に関しては適切な説明を提示していると言えます。また、英英辞典の意味記述に示された直観にも合致していました。

以上が(7a)に当たる部分です。

それではこれで、冒頭に掲げたバス停についての例文は説明できるでしょうか。

6. 事実に照らし合わせての仮説の検証(1)

この節から、(7b)の検証の手続きに移ります。

(7)

a. *Even if* はどのような表現かについての仮説を作る。

b. その仮説に基づいて(6)が説明できるかどうかを検証する。

c. さらに同じ仮説に基づいて、*even if* の(6)以外の事実を説明できるかどうかを検証する。

先に、*even if* についての奇妙な事実を次のようにまとめました。

(6) 廃止になったバス停でバスを待っている人などにかける言葉としての a に対応する英語表現に *even if* を使いたい場合、b の文を単独で使うと不適切になるが、d のようにすると適切になる。

a. ここで待っていてもバスは来ませんよ。あちらでお待ちにならないと。
b. # *Even if* you wait here, the bus won't pick you up. But if you wait at that bus stop over there, it will.
c. **If** you wait here, the bus won't pick you up. But if you wait at that bus stop over there, it will.
d. *If you wait round the back, the bus won't pick you up. Even if* you wait here, the bus won't pick you up. But if you wait at that bus stop over there, it will.

まず(6b)を取り上げます。これに *even if* の意味構造についての仮説(40)を適用して解析してみます。解析した結果に何か不自然なところがあれば、それがこの文の不自然さの原因と説明されることになります。解析結果に不自然なところがなければ、この文の不自然さは(40)では説明できないことになります。

説明ができない場合には、仮説のどこに問題があったかを検討することが必要になります。その問題の性質によって、仮説を丸ごと「破棄」するか、大枠は残したまま仮説を一部「修正」するか、もしくは全部残しつつ新しい概念を付け加えて「拡張」するか、のいずれかが必要になります。また、仮説が事実を説明できれば、その限りにおいてその仮説は誤っていない(とりあえず正しい)ということになります。

実際に解析してみると、次のようになります。

(41) **Even** *if you wait here*, the bus won't pick you up.の意味構造

予想の焦点: ここで待つ場合 (if you wait here)

誰もが納得するであろう前提:

ここで待つ場合以外に関して言えば、バスに乗れない。

(ありがちな)例外予想: でもここで待つ場合は例外。この場合はバスに乗れる。

例外予想の打消し・例外性の否定:

ここで待つ場合も例外ではない。バスに乗れない。

これは次のように言っていることになります。

(42) ここで待つ以外の場合には、あなたはバスには乗れない(誰もが納得するであろう前提)。でも、ここで待つことは例外で、ここならバスに乗れるとあなたは思っているのだろう(例外の予想)。しかし実際には、ここで待つ場合も例外ではない。ここで待つ場合もバスには乗れない(例外性の否定)。

この文を何らかの文脈に組み込まれた文として見るのではなく、単独で存在する文として見た場合、(42)は実質的に次のようなことも伝えていると解釈されることになるでしょう。

(43) そもそもあなたはバスに乗ることはできないのだ。そしてそれは、ここに立つことで変わるわけではないのだ。

これはバス停を間違えて待っている人に対する発言としては不自然ですし、失礼ですらあります。この(43)の不自然さ、不適切さが(6b)の不自然さの原因であると説明することができることになるわけです。

この説明が母語話者の直観にも合っていることを示す傍証として、(44)を挙げておきます。これは(6b, c)に対する反応として田中(2005:31)が挙げているものです。

(44) In [6c] the speaker is suggesting the possibility that the hearer will be waiting for the bus in that place. If you replace the ``if" with ``even if" *the speaker is implying that the hearer is grossly mistaken in thinking that the bus will stop there just because he is standing there*. In other words, the first statement with the conditional is more polite because the speaker accepts the fact that he is making an assumption about why the hearer is standing there.　(田中(2005: 31); 強調は本多)

斜字体部分を含む文がポイントです。若干ややこしいですが、内容を日本語で説明すると次のようになります。

(45) この``if"を``even if"に置き換えると、話し手は暗黙のうちに次のように言っていることになってしまう。「聞き手はとんでもない間違った考え方をしている。それは、「自分がただここに立ってさえいれば、状況が変わってバスが止まるようになる」という考え方だ」

本節の(42)と(43)はこの直観を適切に捉えています。

それでは、ダメなはずの(6b)が、次の(6d)のようにすれば適格になることは説明できるでしょうか。

(6d) *If you wait round the back, the bus won't pick you up. Even if* you wait here, the bus won't pick you up. But if you wait at that bus stop over there, it will.

(6b)と(6d)では何が違うのでしょうか。

まず確認しておかなければならないことは、(41)は(6b)だけではなく(6d)にも同じように適用されるということです。対象となる文自体は同一だからです。つまり、自然かどうかの違いは(41)が当てはまるかどうかの違いではないということです。それでは何が違うのでしょうか。

(6b)と(6d)の違いは、「ここで待つ場合以外」の場合が具体的に特定されているかどうかにあります。これは(6b)では特定されていないのに対して、(6d)では特定されています。具体的に特定されていない場合、「ここで待つ場合以外」は通常は(いわゆる「デフォールト」で)「どこで待っていても」と解釈されることになるでしょう。そこから(43)のような解釈が生じることになるわけです。それに対して(6d)のように「ここで待つ場合以外」の場合が具体的に特定されている場合には、これが限定として機能することになります。

この場合に合わせて先の(42)を調整すると、次のようになります。

(46) あっちのバス停で待つ場合には、あなたはバスには乗れない(誰もが納得するであろう前提)。でも、ここで待つことは例外で、ここならバスに乗れるとあなたは思っているのだろう(例外の予想)。しかし実際には、ここで待つ場合も例外ではない。ここで待つ場合もバスには乗れない(例外性の否定)。

ここからは、「どこで待っても」という解釈は生じず、「そもそも乗れない」という(43)のような解釈は生じないことになります。したがって、次の内容をつなげても談話が矛盾なく成り立つことになります。

(47) でもそっちで待てばあなたはバスに乗れる。

(6d)が適格になるのはこのためだと言えます。

以上から、この章のアプローチは(6b)と(6d)の違いを説明できることになります。

以上でこの章の出発点となった事実(6)の説明はできたことになります。

(6) 廃止になったバス停でバスを待っている人などにかける言葉としての a に対応する英語表現に *even if* を使いたい場合、b の文を単独で使うと不適切になるが、d のようにすると適切になる。

a. ここで待っていてもバスは来ませんよ。あちらでお待ちにならないと。
b. # *Even if* you wait here, the bus won't pick you up. But if you wait at that bus stop over there, it will.
c. *If* you wait here, the bus won't pick you up. But if you wait at that bus stop over there, it will.
d. *If you wait round the back, the bus won't pick you up. Even if* you wait here, the bus won't pick you up. But if you wait at that bus stop over there, it will.

7. 事実に照らし合わせての仮説の検証(2)：その他の例に適用してみる

7.1. *Even If* が不可能な例

前節までで、(7b)の検証の手続きまでできたことになります。

(7)

a. *Even if* はどのような表現かについての仮説を作る。
b. その仮説に基づいて(6)が説明できるかどうかを検証する。
c. さらに同じ仮説に基づいて、*even if* の(6)以外の事実を説明できるかどうかを検証する。

次にしなければならないのは、(7c)の検証です。この章で採用した *even if* についての仮説を、*even if* の他の例に適用した場合に適切に分析できるかどうか検証するということです。この章の仮説が *even if* の意味記述として本当に妥当であるならば、他の例に適用しても適切に分析できるはずです。言い換えれば、他の例に適用したときに適切に分析できなければ、この章の仮説は一般的な妥当性を欠く不適切なものということになってしまうわけです。その場合には、仮説のどこに問題があったかを検討したうえで、その問題の性質によって、仮説を丸ごと「破棄」するか、大枠は残したまま仮説を一部「修正」するか、もしくは全部残しつつ新しい概念を付け加えて「拡張」するか、のいずれかが必要になります。また、仮説が事実を説明できれば、その限りにおいてその仮説は誤っていない(とりあえず正しい)ということになります。

ということなので、田中(2005)からいくつか例を引いて検証しましょう。

次の例は、*if* 単独では可能ですが、*even if* にするのは不可能な例です。

(48) Daily practice: The importance of daily practice cannot be overstated. After teaching many speed reading classes, one trend has become obvious: Those who practice daily are the ones who get really good at speed reading while those who neglect it don't get good at it. *Of course, all is not lost if you forget to practice once or twice each week.*（週に一回か二回練習を忘れてもすべてがゼロになるわけではない）But the more you skip practice, the worse your end result will be.　（田中(2005:26-27);日本語訳は変更してある。）

参考までに、全体を日本語に訳しておきます。

(48') 毎日練習すること:大事なのは毎日練習することです。これはいくら強調してもし過ぎにはなりません。速読を長年教えてきた経験から、ある一つの傾向が明らかになっています。それは、毎日練習する人が速読の達人になる人であり、練習をないがしろにする人は上達しないということです。**もちろん、週に一回か二回練習を忘れてもすべてがゼロになるわけではありません。**しかし、練習をサボればサボった分だけ、最終の結果は悪くなるのです。

(49) # ... Of course, all is not lost *even if* you forget to practice once or twice each week. ...
（週に一回か二回練習を忘れてもやはりすべてがゼロになるわけではない）

この文についても、やはり *even if* の意味構造についての仮説(40)を適用して考えます。その結果として出てきたものに不自然なところがあれば、それがこの文の不自然さの原因と説明されることになります。不自然なところがなければ、この文の不自然さは(40)では説明できないことになります。

それでは、解析してみましょう。これまでの解析法を適用するとどうなるか、みなさんもそれぞれやってみてください。

実際に解析してみると、次のようになります。

(50) Of course, all is not lost **even** *if you forget to practice once or twice each week.* の意味構造

予想の焦点: 週に一度か二度くらい練習し忘れる場合
（if you forget to practice once or twice each week）

誰もが納得するであろう前提:
週に一度か二度くらい練習し忘れる場合以外に関して言えば、すべてがゼロになるわけではない。

（ありがちな）例外予想:
でも週に一度か二度くらい練習し忘れる場合は例外。この場合はすべてがゼロになる。

例外予想の打消し・例外性の否定:
週に一度か二度くらい練習し忘れる場合も例外ではない。すべてがゼロになるわけではない。

（51）

a. 週に一度か二度くらい練習し忘れた以外の場合、すべてがゼロになるわけではないというのは誰でも納得することだろう（誰もが納得するであろう前提）。だが、「週に一度か二度くらい練習し忘れた場合は例外なのではないか、この場合はすべてがゼロになるのではないか」と思う人がいるかもしれない（ありがちな例外予想）。しかし実は、週に一度か二度くらい練習し忘れた場合も例外ではない。その場合でも、すべてがゼロになるわけではないのだ（例外性の否定）。

b. 週に一度か二度くらい練習し忘れた場合も、やはりすべてがゼロになるわけではないのだ。

（50）（51）に不自然なところはあるでしょうか。

まず「誰もが納得するであろう前提」が不自然です。これは極端な話、「練習を忘れる日が週に6回とか7回の場合でも、すべてがゼロになるわけではない」ということになりかねません。これはサボり放題ということです。これを誰もが納得するであろう前提として想定するのは、この文章の趣旨から考えて明らかに不自然です。

さらにそれに加えて、「例外の予想」も不自然です。サボり放題という前提があるときに、「ただし練習し忘れるのが週に一～二回のときは例外。このときはすべてがゼロになる」という予想をありがちなものとして想定するのは矛盾していることになり、非常に不自然です。

つまり（51）は「誰もが納得するであろう前提」と「例外の予想」が不自然です。これがこの文脈におけるこの文の不自然さの原因であると説明できることになります。

それでは、次の例はどのように解析されるでしょうか。

(52)
A: Are we going to the party tonight?
B: Well, I have a headache, so I'd rather stay in bed.
--- # *Even if* I go, I won't enjoy it.
--- *If* I go, Iwon't enjoy it.

一見すると、これは次のように解析されるように思われるかもしれません。

(53)（暫定版）**Even** *if I go*, I won't enjoy it.の意味構造
予想の焦点: パーティに参加した場合（if I go）
誰もが納得するであろう前提:
パーティに参加した場合以外に関して言えば、パーティは楽しくない。
(ありがちな)例外予想:
でもパーティに参加した場合は例外。この場合はパーティは楽しい。
例外予想の打消し・例外性の否定:
パーティに参加した場合も例外ではない。パーティは楽しくない。

(54)
a. パーティに参加した以外の場合、パーティは楽しくないというのは誰でも納得することだろう（誰もが納得するであろう前提)。だが、「パーティに参加した場合は例外なのではないか、この場合はパーティは楽しいのではないか」と思う人がいるかもしれない(ありがちな例外予想)。しかし実は、パーティに参加した場合も例外ではない。その場合でも、パーティは楽しくないのだ(例外性の否定)。
b. パーティに参加した場合でも、やはりパーティは楽しくない。

この解析の仕方の場合、「パーティに行った場合以外」として想定されるのは「パーティに行かなかった場合など」ということになるでしょう。となると、「パーティに行かなかった場合などは、パーティは楽しくない」というのが誰もが納得するであろう前提ということになるでしょう。結局この文は、全体と

して「パーティは、行かなかれば楽しくないのは当然である。そして、もしかしたら行けば楽しいと思われるかもしれないが、実は行っても楽しくはない。」と言っていることになってしまいます。これはたしかに不自然と言えば不自然です。が、それ以前に不可解です。この文の不自然さははたしてこのような不可解さに原因があるのでしょうか。

実はこの解析は、(52)の状況を適切に捉えていません。この状況においては話し手は頭痛を感じており、それがパーティを楽しめるかどうかのカギになっています。しかしながらこの解析は、この重要なことを捉えていません。頭痛に言及していないのです。

実際には、(52)は発話状況を考慮して次のように解析するのが妥当ということになります。

(55)（改訂版）**Even** *if I go*, I won't enjoy it.の意味構造

予想の焦点: **頭痛を抱えた今の状態で**パーティに参加した場合
（if I go）

誰もが納得するであろう前提:

頭痛を抱えた今の状態でパーティに参加した場合以外に関して言えば、パーティは楽しくない。

(ありがちな)例外予想:

でも**頭痛を抱えた今の状態で**パーティに参加した場合は例外。この場合はパーティは楽しい。

例外予想の打消し・例外性の否定:

頭痛を抱えた今の状態でパーティに参加した場合も例外ではない。パーティは楽しくない。

(56)

a. 頭痛を抱えた今の状態でパーティに参加した以外の場合、パーティは楽しくないというのは誰でも納得することだろう（誰もが納得するであろう前提)。だが、「頭痛を抱えた今の状態でパーティに参加した場合は例外なのではないか、この場合はパーティは楽しいのではないか」と思う人がいるかもしれない(ありがちな例外予想)。しかし実は、頭痛を抱えた今の状態でパーティに参加した場合も例外ではない。その場合でも、パーティは楽しくないのだ(例外性の否定)。

b. 頭痛を抱えた今の状態でパーティに参加した場合でもやはり、パーティは楽しくない

ここで「誰もが納得するであろう前提」「(ありがちな)例外予想」に注目しましょう。この場合、誰もが納得するであろう前提から導かれる帰結として「頭痛がなくて体調がよい状態でパーティに参加した場合、パーティは楽しくない」があります。これは不自然です。また例外の予想に関しては、「でも頭痛を抱えた今の状態でパーティに参加した場合は例外で、その場合は、パーティは楽しい」と予想していることになります。このような予想は不自然です。すなわちこの文は「誰もが納得するであろう前提」と「(ありがちな)例外予想」が不自然で、それがこの文脈におけるこの文の不自然さの原因と説明されることになるわけです。

以上で、(49)のように *even if* を使うことが不自然になる仕組みが説明されたことになります。

7. 2. *Even If* が可能な例

次に *even if* が可能な例について検証しましょう。

(57)

a. Even if somebody throws you a ball, you don't have to catch it.
b. Even if I were a Rockefeller, I would not be able to pay for this.
c. Even if we give him the VIP treatment, he won't be content.
d. Will you go hiking even if it rains?
e. Don't worry, the party will be fine even if Basil does turn up.
f. You will get a scholarship, even if you don't get an A.　　(田中(2005))

(57a-d)は単独の *if* と *even if* の両方が可能な例で、(57e, f)は単独の *if* は不自然ですが *even if* は可能になる例です。ただしこの章の主題は *even if* であって単独の *if* ではないので、ここでは両者を区別しないことにします。

例のいくつかについて解析すると、次のようになります。これらに不自然なところがなければ、この章の枠組みで(57)の自然さが説明されることになります。不自然なところがあれば、この章の枠組みは(57)が不自然であると予測することになり、(57)の自然さはこの章の枠組みでは説明できないことになります。

(57a) **Even** *if somebody throws you a ball*, you don't have to catch it.の意味構造
　　予想の焦点: 誰かがボールを投げてきた場合
　　(if somebody throws you a ball)

誰もが納得するであろう前提:

誰かがボールを投げてきた場合以外に関して言えば、ボールを取る必要はない。

(ありがちな)例外予想:

でも誰かがボールを投げてきた場合は例外。この場合はボールを取らなければならない。

例外予想の打消し・例外性の否定:

誰かがボールを投げてきた場合も例外ではない。ボールを取る必要はない。

(57a')

a. 誰かがボールを投げてきた以外の場合、ボールを取る必要はないというのは誰でも納得することだろう（誰もが納得するであろう前提)。だが、「誰かがボールを投げてきた場合は例外なのではないか、この場合はボールを取らなければならないのではないか」と思う人がいるかもしれない(ありがちな例外予想)。しかし実は、誰かがボールを投げてきた場合も例外ではない。その場合でも、ボールを取る必要はないのだ(例外性の否定)。

b. 誰かがボールを投げてきた場合でもやはり、ボールを取る必要はない

(57d) Will you go hiking **even** *if it rains*?の意味構造

予想の焦点: 雨が降った場合（if it rains）

誰もが納得するであろう前提:

雨が降った場合以外に関して言えば、ハイキングに行く。

(ありがちな)例外予想:

でも雨が降った場合は例外。この場合はハイキングに行かない。

例外予想の打消し・例外性の否定:

雨が降った場合も例外ではない。ハイキングに行く。

(57d')

a. 雨が降った以外の場合、ハイキングに行くというのは誰でも納得することだろう（誰もが納得するであろう前提)。だが、「雨が降った場合は例外なのではないか、この場合はハイキングに行かないのではないか」と思う人がいるかもしれない(ありがちな例外予想)。しかし実は、雨が降った場合も例外ではない。その場合でも、ハイキングに行くのだ(例外性の否定)。

b. 雨が降った場合でもやはり、ハイキングに行く

この文は疑問文ですが、煩雑さを避けるため平叙文の部分だけを考えています。この例の場合、「雨が降った」以外としては「晴れ」「曇り」あたりが想定されていて、「雪」などは想定外と見るのが自然でしょう。

(57e) Don't worry, the party will be fine **even** *if Basil does turn up*.の意味構造

予想の焦点: バジルが現れた場合（if Basil does turn up）

誰もが納得するであろう前提:

バジルが現れた場合以外に関して言えば、パーティは楽しい。

(ありがちな)例外予想:

でもバジルが現れた場合は例外。この場合はパーティは楽しくない。

例外予想の打消し・例外性の否定:

バジルが現れた場合も例外ではない。パーティは楽しい。

(57e')

a. バジルが現れた以外の場合、パーティは楽しいというのは誰でも納得することだろう（誰もが納得するであろう前提)。だが、「バジルが現れた場合は例外なのではないか、この場合はパーティは楽しくないのではないか」と思う人がいるかもしれない(ありがちな例外予想)。しかし実は、バジルが現れた場合も例外ではない。その場合でも、パーティは楽しいのだ(例外性の否定)。

b. バジルが現れた場合でもやはり、パーティは楽しい

この場合の「楽しい」は「聞き手を含む参加者にとって」ということでしょう。

(57f) You will get a scholarship, **even** *if you don't get an A*.の意味構造

予想の焦点: A 評価を取れない場合（if you don't get an A）

誰もが納得するであろう前提:

A 評価を取れない場合以外に関して言えば、奨学金をもらえる。

(ありがちな)例外予想:

でも A 評価を取れない場合は例外。この場合は奨学金をもらえない。

例外予想の打消し・例外性の否定:

A 評価を取れない場合も例外ではない。奨学金をもらえる。

(57f)

a. A 評価を取れない以外の場合、奨学金をもらえるというのは誰でも納得することだろう（誰もが納得するであろう前提）。だが、「A 評価を取れない場合は例外なのではないか、この場合は奨学金をもらえないのではないか」と思う人がいるかもしれない(ありがちな例外予想)。しかし実は、A 評価を取れない場合も例外ではない。その場合でも、奨学金をもらえるのだ(例外性の否定)。

b. A 評価を取れない場合でもやはり、奨学金をもらえる

「A 評価を取れない場合以外」というのは回りくどいですが、要するに「A 評価をとれた場合」ということです。

以上、いずれも日常的な推論として不自然なところはなく、それぞれの文の解釈を適切に捉えていると言えます。

8. いちおうのまとめ

以上で、この章の課題として提示した

(7)

a. *Even if* はどのような表現かについての仮説を作る。

b. その仮説に基づいて(6)が説明できるかどうかを検証する。

c. さらに同じ仮説に基づいて、*even if* の(6)以外の事実を説明できるかどうかを検証する。

については一通り達成したことになります。

9. *Even If* と同様の仕組みで「譲歩」を表す表現（1）

9. 1. 事例

この章では *even if* が持つ「譲歩」の意味を「例外予想の打消し・例外性の否定」に基づいて考えてきました。ここで一つ問題を考えてみたいと思います。これと同様の仕組みで譲歩を表す表現は、他にあるでしょうか。

第 3.1 節の英英辞典の記述の検討からもうかがえる通り、「例外予想の打消し・例外性の否定」とは「変化の予想の打消し・変化の存在の否定」の一つです。その観点から考えなおすと、実際そのような仕組みによると想定される譲歩表現は存在します。*If ... still* です。

と言ってもすぐにはピンと来ないかもしれません。これについてくわしく考えてみましょう。

いわゆる譲歩の表現としての *if ... still* の使用例としては、たとえば次のようなものが挙げられます。

(58) You can *still* get a scholarship *if* you don't meet these requirements but it will be more difficult.[11]

これは(57f)と類似した内容の文です。(57f)では *even* の無い単独の *if* は不自然だったわけですが、類似の内容の文でもこのように *still* をつければ *even* が無くても自然になるわけです。そこで、*even if* で *even* の役割を明らかにすることが重要であったのと同様に、*if ... still* においても *still* の役割を明らかにすることが課題となります。

9.2. 元になる意味・用法の分析

それでは *still* とはどのような性質の語なのでしょうか。日本語に訳せば「まだ」「今でも」「やはり」などとなりますが、英語の表現の意味・用法を日本語訳から考えることには無理があります。あらためて OALD[12] で確認しておきましょう。

(59)

1 continuing until a particular point in time and not finishing

I wrote to them last month and I'm still waiting for a reply.

Mum, I'm still hungry!

Do you still live at the same address?

There's still time to change your mind.

It was, and still is, my favourite movie.

2 despite what has just been said

Although he promised faithfully to come, I still didn't think he would.

We searched everywhere but we still couldn't find it.

The weather was cold and wet. Still, we had a great time.

3 used for making a comparison stronger

The next day was warmer still.

If you can manage to get two tickets that's better still.

4 **still more/another** even more

There was still more bad news to come.

この意味記述を日本語にすると、おおよそ次のようになります。

(59')
1 ある時点において続いていて、終わっていないことを表す。
2 直前の内容にも関わらず、ということを表す。
3 比較を強める働きを持つ。
4 still more/another さらになお

この(59)の(1)は時間表現として「まだ」などと訳される意味で、(2)が譲歩の意味です。譲歩の意味は時間表現としての意味につながっていると想定されます。そこで時間の意味を検討してみましょう。

時間表現としての意味の記述に``not finishing"とあることに注意してください。これは、時間表現としての *still* に「状況が変わっているのではないかという予想」と「その予想の打消し」が関わっていることを示しています。

同様の記述は LDCE[13] にも見られます。同辞書の *still* の項での``WORD CHOICE"で時間表現としての *still* と *always* が比較されていますが、そこには次のようにあります。

(60) **still**, **always**

Use **still** to say that a previous situation has not changed, and is continuing at the time of speaking.

He still lives (NOT always lives) with his parents.
They still haven't sold their house.
I still get upset when I think about it.

(**still** は先行の状況が変わっていなくて、発話の時点で続いていることを言うのに使いなさい。)

ここに``a previous situation has not changed"とあります。これも状況の変化の予想と、その変化予想の打消しの現れです。

以上を踏まえて *still* を含む次の文の意味構造を検討してみましょう。

(61) I'm still hungry!

これは次のようになります。

(62) I'm still hungry.の意味構造

予想の根拠ないし変化のきっかけ: 何か食べる

誰もが納得するであろう前提(きっかけ以前の状況):

何か食べるということがある前は、空腹である。だがこれは当然のこと。

(ありがちな)状況変化の予想:

でも何か食べるということがあった後は、状況は別。その後は空腹ではないという状況が当然予想されること。

変化予想の打消し:

何か食べるということがあった後も状況に変化はない。空腹である

時間経過に即した書き方

「当然のことながら空腹である」

↓

「何か食べる」

↓

「空腹ではないに状況が変わるかと思いきや、変わらず空腹である」

(63)

a. 何か食べる前は空腹であるというのは誰でも納得することだろう(誰もが納得するであろう前提としてのきっかけ以前の状況)。だが、何か食べるというきっかけがあった以上、状況は変わっていてしかるべき。その後は空腹ではないという状況になっていてしかるべき(ありがちな状況変化の予想)。しかし実は、何か食べるということの後も状況に変化はない。その後も変わらず空腹である。

b. 今もまだ空腹が続いています。

以上が時間表現としての *still* の意味構造です。

9.3.「譲歩」の意味の分析

譲歩の *still* は前節で取り上げた時間用法と並行した構造で捉えることができます。

(64) We searched everywhere but we still couldn't find it.の意味構造

予想の根拠ないし変化のきっかけ: あらゆるところを探しまわる

誰もが納得するであろう前提(きっかけがないときの状況):

あらゆるところを探しまわるということがない状況では、それが見つかっていない。

(ありがちな)状況変化の予想:

でもあらゆるところを探しまわるということがあった以上、状況は別。それが見つかってしかるべき。

変化予想の打消し:

あらゆるところを探しまわるということがあったが、状況に変化はない。それが見つかっていない。

(65)

a. あらゆるところを探しまわるということがなければそれは見つかっていないというのは誰でも納得することだろう(誰もが納得するであろう前提としてのきっかけ以前の状況)。だが、あらゆるところを探しまわるというきっかけがあった以上、状況は変わっていてしかるべき。その後はそれが見つかったという状況になっていてしかるべき(ありがちな状況変化の予想)。しかし実は、あらゆるところを探しまわるということによっても状況に変化はない。結局はやはりそれは見つかっていない。

b. あらゆるところを探し回った。が、それでもやはり、それは見つからなかった。

(66) The weather was cold and wet. Still, we had a great time.の意味構造

予想の根拠ないし変化のきっかけ: 天気が悪い

誰もが納得するであろう前提(きっかけがないときの状況):

天気が悪いということがない状況では、楽しい。

(ありがちな)状況変化の予想:

でも天気が悪いということがあった以上、状況は別。楽しくなくてしかるべき。

変化予想の打消し:

天気が悪いということがあったが、状況に変化はない。楽しい。

(67)

a. 天気が悪いということがなければ楽しいというのは誰でも納得することだろう(誰もが納得するであろう前提としてのきっかけ以前の状況)。だが、

天気が悪いというきっかけがあった以上、状況は変わっていてしかるべき。その後は楽しくないという状況になっていてしかるべき（ありがちな状況変化の予想）。しかし実は、天気が悪いということによっても状況に変化はない。結局はやはり楽しい。

b. 天気は雨模様で寒かったが、それでもやはり、その日は楽しかった。

9.4. *Still* が *If* と共起するとき

以上を踏まえて、*still* が *if* 節と共起する場合を考えましょう。

まず、ここで問題になるのは *still* が *if* 節の外側に現れる場合です。つまり（68a）のように *still* が *if* 節の内側にある場合ではなく、（68b）のように *if* 節の外側にある場合です。

（68）

a. Talk to your doctor *if* you're *still* worried.[14]

b. You can *still* get a scholarship *if* you don't meet these requirements but it will be more difficult.

そしてこれはさらに二つの場合に分かれます。それは、*still* の意味構造に現れる「きっかけ」に *if* 節の状況が対応する場合と、しない場合です。

If 節が *still* の「きっかけ」に対応する場合の例としては、繰り返し挙げている次の例文があります。

（58）You can *still* get a scholarship *if* you don't meet these requirements but it will be more difficult.

これを解析すると次のようになります。

（69）You can still get a scholarship if you don't meet these requirements but it will be more difficult.の意味構造

予想の根拠ないし変化のきっかけ:

これらの要件を満たしていない場合

（if you don't meet these requirements）

誰もが納得するであろう前提（きっかけがないときの状況）:

これらの要件を満たしていない場合以外の状況では、奨学金がもらえる

(ありがちな)状況変化の予想:

でもこれらの要件を満たしていない場合、状況は別。奨学金はもらえない。

変化予想の打消し:

これらの要件を満たしていない場合も状況に変化はない。奨学金がもらえる

(70)

a. これらの要件を満たしていないということがなければ奨学金がもらえるというのは誰でも納得することだろう(誰もが納得するであろう前提としてのきっかけ以前の状況)。だが、これらの要件を満たしていないというきっかけがある以上、状況は変わってしかるべき。つまり奨学金はもらえない。という状況になってしかるべき(ありがちな状況変化の予想)。しかし実は、これらの要件を満たしていないということによっても状況に変化はない。結局はやはり奨学金がもらえる。

b. これらの要件を満たしていない場合でもやはり/なお、奨学金をもらうことは可能です(が、難しくはなります)。

「誰もが納得するであろう前提」が二重否定になっているので少しややこしいですが、これは実質的には「これらの要件を満たした場合は奨学金がもらえる」ということです。

この意味構造が *even if* を含む文の意味構造と並行した構造をもつことに注意しましょう。そして *even if* を含む文と同様に譲歩の意味を持つことにも注意しましょう。

ちなみにこの場合、接続詞としての *if* それ自体に「譲歩」の意味があるわけではありません。それは次のような例から明らかになります。

(71)

``What *if* you are wrong?" ``*Still*, it won't matter."

(「間違ってたらどうするの」「そうだとしても大したことないさ」)[15]

この *what if* に現れる *if* はこれ自体では「譲歩」ではありません。*If* 節が後に出てくる *still* と合わさり、*still* の「きっかけ」を表すことで *if ... still* が全体として合成的に譲歩に解釈されるわけです。*If* それ自体については、第 4.2 節で述べたように、十分条件を表す、というのが本章で採用している仮説であり、そ

の仮説はこの例に関しても妥当です。

If 節が *still* の「きっかけ」に対応しない場合の例としては、次のようなものがあります。これはある大学の授業についての学生の感想です

（72）... its a challenging class, but you can *still* get an A in it *if* you work hard[16]
（授業は大変ですが、それでもがんばればAを取れます。）

この場合の *if* 節は、「きっかけ」ではなく、「きっかけ」があるにも関わらず状況が変わらない、その「変わらなさの原因」を表すものとなっています。

Still の「きっかけ」を指し示す *if* 節と「変わらなさの原因」を表す *if* 節は一つの文の中に両方同時に現れることがあります。

（73）*If* you flunk the first exam, you can *still* earn an ``A" *if* you work hard.[17]
（最初のテストがダメでも、がんばればAを取れます。）

この文では、最初の *if* 節が *still* に関わる「きっかけ」に対応し、後に出てくる *if* 節が「変わらなさの原因」に対応しています。

9. 5. *Even If* と *If ... Still*

Even if が *if ... still* と並行した意味構造をもつということは、両者が親和性をもつということです。その結果、両者は一つの文に共起できることになります。その例を以下に示します。

（74）
a. *Even if* you have dark skin, you *still* need protection from the sun.[18]
b. *Even if* you take a taxi, you'll *still* miss your train.[19]

10. *Even If* と同様の仕組みで「譲歩」を表す表現（2）

Even if と同じように「変わりそうに思えるけど実は結局変わらない」ということから譲歩を表す表現としては、他に *all the same, nevertheless* などがあります。また、*still* に近い意味構造をもつ日本語の表現としては「なお」や「やはり」「やっぱり」などがあります。これらについての検討は読者の皆さんにお任せしたいと思います。

11. 方法論的な省察:この章は何をしなかったか、そして何をしたか

11. 1. 日英語対照研究についての考え方

Even if についてはまだまだ考えるべきことはたくさんありますが、それは割愛します。

最後に、方法論的な観点からこの章の内容を振り返っておきたいと思います。とくに、この章で何をしたかという観点とは別に、まずこの章では何をしなかったか、何を意識的に避けたかという観点から考えていきましょう。

この章の出発点は、次の二つの日英語のペアでした。

(75)
a. Even if she survives, she'll never fully recover. (=(1))
b.かりに一命を取り留めても、完治することはないでしょう。 (=(2))

(76)
a. ここで待っていてもバスは来ませんよ。あちらでお待ちにならないと。
b. # Even if you wait here, the bus won't pick you up. (=(3))

しかしこの章の説明はこの日英対照を出発点としたものではありません。この章は、日本語の「ても」については一切説明をしていません。

そもそもこの章は、「英語の *even if* と日本語の「ても」はどう違うか」ということを問題として設定していません。これにははっきりした理由があります。

「A と B はどう違うのか」という問題が問題として成立するためには、両者が基本的には同じ性質のものであるということが前提となります。基本的な性質が異なるもの同士を、比較することはできないからです。たとえば、次のような問題は問題として成立しません。

(77)
a. 認知言語語学はアゲハ蝶とどう違うのか。
b. 生成文法は恋の悩みとどう違うのか

たしかに認知言語学はアゲハ蝶ではありません。その意味で認知言語学とアゲハ蝶は違います。しかしこれらについて「どう違うか」は解くべき問題として成立しません。それは認知言語学とアゲハ蝶があまりにも違いすぎるからです。生成文法と恋の悩みについても同様です。

それに対して、次の問題は問題として成立します。

(78) 認知言語語学は生成文法とどう違うのか

これは、認知言語学と生成文法がどちらも、人間の言語能力のありようを解明することを目標とする理論言語学であるという点で、基本的な性質を同じくすることによります。

したがって、「英語の *even if* と日本語の「ても」はどう違うか」を問題として設定するということは、両者が基本的に同じ性質のものであるという前提を暗黙のうちに採用することになります。しかしながら、この章ではあえてこの前提を採用しないことを選択しています。

両者はたしかに相互に翻訳関係にあります。しかし日本語と英語のように、系統的にも類型論的にも地理的にも離れた言語において、翻訳関係にあるというだけで同じ性質のものという前提を採用することは危険です。英語の *even if* は *even if* それ自体として研究してその性質を明らかにすべきであるという立場をこの章は取っています。日本語の「ても」についても同様です。

両者をそれぞれ個別に検討した結果、最終的に同じ性質を持つものと判明する可能性は、もちろんあります。しかしそれは、結果として明らかになることであって、前提として暗黙裡に採用するべきものではないというのがこの章の立場です。

それでは、対照研究には意味がないのかと言えば、もちろんそうではありません。対照研究の意義は、一つの言語を見ているだけでは気がつきにくい言語事実を明らかにしてくれることにあります。対照研究が明らかにした事実は、説明すべき対象として大きな価値を持つものです。しかし対照研究が明らかにした事実は説明が目指すべき到達点であって、これを説明の出発点とすることは危険だということです。

対照研究で明らかになった日本語の言語事実は、まずは日本語研究の問題として考えるべきであり、同じく対照研究で明らかになった英語の事実は、まずは英語研究の問題として考えるべきである、というのがこの章の立場です。

11.2. 英語内の類義表現の対比についての考え方

前節で述べたことは、複数言語の対照だけでなく、単一言語内の類義表現の対比についても成り立ちます。

具体的に言うと、この章では単独の *if* の譲歩の用法と *even if* を対比して両者がどう違うかを問題にすることを、意識的に避けています。たとえば、次の例における *if* と *even if* の振舞いの違いが何に由来するかを問題にすることをこの章は意識的に避けています。

(79)

a. Of course, all is not lost *if* / # *even if* you forget to practice once or twice each week.
(=(48), (49))

b. *If* / *Even if* somebody throws you a ball, you don't have to catch it. (=(57a))

c. You will get a scholarship, # *if* / *even if* you don't get an A. (=(57f))

この章が問題にしたのは、*even if* に関して「なぜ(a)では容認されないのに(b)(c)では容認されるか」ということでした。そしてもしかりにこの章が単独の *if* について問題にするとしたら、問いの立て方はやはり「なぜ(a)(b)では容認されるのに(c)では容認されないのか」ということになるでしょう。

このような立場を取る理由は前節と同じです。「単独で譲歩に使われる場合の *if* と *even if* はどう違うか」を問題にするということは、両者が基本的には同じ性質のものであるという前提を暗黙のうちに採用することになります。しかしながら、この章の考え方では、*even if* が譲歩を表す仕組みには *even* が寄与している部分が大きいことになります。したがって *even* を伴わない単独の *if* と *even if* を同じ性質のものと想定することは危険なのです。

それでは *if* と *even if* の対比の研究に意味がないのかと言えば、それについてのこの章の立場も前節と同じです。複数の表現を対比することの意義は、一つの表現を見ているだけでは気がつきにくい事実を明らかにしてくれることにあります。そのような対比による研究が明らかにした事実は、解明すべき対象として大きな価値を持つものです。しかしそのような事実は説明の目指すべき到達点であって、これを説明の出発点とすることは危険だということです。

対比による研究で明らかになった *even if* についての事実は *even if* の問題として考えるべきであり、同じく対比による研究で明らかになった単独の *if* に関わる事実は単独の *if* の問題として考えるべきであるというのがこの章の立場です[20]。

またこの章では *even if* と *if ... still* の類似性を指摘しましたが、これも *even if* と *if* の対比を説明の出発点とする立場では気がつかないことでしょう。

12. この章のまとめ

以上、この章ではいわゆる「譲歩」の *even if* を検討してきました。*Even if* を *even* と *if* からなる複合表現と見ることで、*even if* における *even* の役割に注目することができました。この表現は、「誰もが納得するであろう前提」「(ありがちな)例外予想」「例外予想の打消し・例外性の否定」という構造で譲歩を表すと考えることができるのでした。

そして「例外予想の打消し」は「変化予想の打消し」の一つでした。そして

「変化予想の打消し」によって譲歩を表す表現として *still* がありました。つまりこの章の議論は、*even if* の譲歩性と *still* の譲歩性が基本的に同じ性質のものであることを明らかにすることができるものでした。

他方、この章では意識的に避けたことがありました。まず、英語の *even if* と日本語の「ても」の容認可能性の差についてのデータを出発点として、「両者はどう違うか」という問いを立てることはしませんでした。対照研究で明らかにされた事実は、説明の出発点とするのではなく、説明の対象、説明の目指す目標とすべきであるというのがこの章の立場です。「二つのものがどう違うか」という立論は、暗黙のうちに「両者が基本的には同じ性質のものである」という前提を含みます。英語の *even if* と日本語の「ても」がそれぞれどのような性質のものであるかを明らかにすることができる前に、両者を同じ性質のものと見なすのは危険です。したがって、対照研究で明らかになった日本語の言語事実は日本語研究の問題として考えるべきであり、同じく対照研究で明らかになった英語の事実は英語研究の問題として考えるべきであるというのがこの章の立場です。結果としてこの章では、日本語の「ても」については考察せず、英語の *even if* のみを扱うことになったわけです。

同じことは英語という一言語の中の類義表現の扱いにも言えることなのでした。単独の *if* の譲歩を表す用法と *even if* を対比させて議論することはこの章では意識的に避けました。「単独の *if* と *even if* はどう違うか」という問いを立てるということは、「両者が基本的には同じ性質のものである」という前提を採用するということです。しかしながら、この章の考え方では、*even if* が譲歩を表す仕組みには *even* が寄与している部分が大きいわけです。したがって、*even* を伴わない単独の *if* と *even if* を同じ性質のものと想定することは避けるべきなのでした。

その代わり、ということではありませんが、この章では *if ... still* が基本的に *even if* と同じ性質のものであることを示しました。通常この二つが合わせて検討されることはないことを考えると、このことはこの章のアプローチのオリジナルな知見ということができるでしょう。

以上でこの章を閉じます。

13. 章末問題

次の文は *even if* が可能な例です。本文にならって解析して、自然か不自然かを評価することで本文のアプローチが妥当かどうか確認してください。

(80)

a. *Even if* I were a Rockefeller, I would not be able to pay for this.

（ロクフェラー一族の人間だったとしても、これを買う余裕はない。）

b. *Even if* we give him the VIP treatment, he won't be content.

（VIP 待遇しても、彼は満足しませんよ。）

注

1 この章の内容は 2012 年度の「意味論講義」の授業内容の一部を改訂したものです。

2 *Longman Dictionary of Contemporary English on line* s.v. if 7（2013 年 8 月 6 日参照） http://www.ldoceonline.com/dictionary/if_1

3 #は「文法上適格だが意味的に不自然」という印です。

4 *Longman Dictionary of Contemporary English on line* s.v. **if 7**。 2014 年 6 月 5 日参照。http://www.ldoceonline.com/dictionary/if_1

5 *MacMillan Dictionary on line* s.v. **even**（phrases）。 2014 年 6 月 5 日参照。http://www.macmillandictionary.com/dictionary/british/even#even-if

6 *The Cambridge Advanced Learner's Dictionary & Thesaurus on line* s.v. **even**。2014 年 6 月 5 日参照。 http://dictionary.cambridge.org/dictionary/british/even_1

7 *Oxford Advanced Learner's Dictionary* s.v. **even** （idioms）。 2014 年 6 月 5 日参照。 http://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/even_1

8 *COBUILD* s.v. **even** 2014 年 6 月 5 日参照。http://dictionary.reverso.net/english-cobuild/even

9 「誘導推論」（invited inference）については、くわしくは Geis and Zwicky（1971）, 坂原（1985）などを参照してください。

10 “Conditional Perfection”（条件文の完成）と呼ばれます（Geis and Zwicky（1971）, 坂原（1985））。

11 http://www.squidoo.com/how-to-get-a-college-lacrosse-scholarship / http://www.athleticscholarships.net/lacrossescholarships.htm いずれも 2013 年 8 月 8 日参照。

12 http://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/still_1 2014 年 3 月 28 日参照。

13 http://www.ldoceonline.com/dictionary/still_1 2013 年 8 月 8 日参照。

14 *Oxford Advanced Learner's Dictionary* s.v. **talk**。 2014 年 6 月 29 日参照。http://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/talk4_1

15 『ウィズダム英和辞典（第 3 版）』s.v. **still** より。

16 http://www.ratemyteachers.com/george-peck/163948-t　2014年6月29日参照。なお、この文の *its* は原文のままの表記。英語の通常の正書法では *it's* です。

17 http://www.ratemyprofessors.com/ShowRatings.jsp?tid=196289 2014年6月30日参照。

18 *Oxford Advanced Learner's Dictionary on line* s.v. **dark**（idioms）。 2014年3月26日参照。 http://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/dark_1

19 *The Cambridge Advanced Learner's Dictionary & Thesaurus on line* s.v. **even**。2014年3月28日参照。 http://dictionary.cambridge.org/dictionary/british/even_1

20 *Be going to* を取り扱った章で、ひたすら *be going to* の性質だけを考えていて、*will* の性質については議論しなかったことを思い出された方もいらっしゃるかと思います。

参考文献

Fraser, B.（1969）. ``An Analysis of Concessive Conditionals,” *CLS*, 5, 66-75.

Fraser, B.（1971）. ``An Analysis of `even' in English,” In C. J. Fillmore and D. T. Langendoen, *Studies in Linguistic Semantics*. New York: Holt, Rinehart and Winston.

Geis, M. L. and Zwicky, A. M.（1971）. ``On Invited Inferences,” *Linguistic Inquiry*, 2（4）, 561-566.

『ウィズダム英和辞典（第3版）』（2013）

坂原茂（1985）.『日常言語の推論』.東京: 東京大学出版会. 認知科学選書２.

田中廣明（2005）.「（even）if 再考:譲歩か条件か」『関西外国語大学研究論集』, 82, 19-34.

藤井聖子（2002）.「所謂「逆条件」のカテゴリー化をめぐって---日本語と英語の分析から---」.生越直樹（編）,『対照言語学』 249-280. 東京: 東京大学出版会